

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号： 14301
 研究種目： 研究活動スタート支援
 研究期間： 2011～2012
 課題番号： 23830038
 研究課題名（和文） パーソナリティ特性と身体的・精神的・社会的健康に関する発達心理的研究
 研究課題名（英文） A developmental psychological study on personality traits and physical, mental, and social health
 研究代表者
 高橋 雄介（TAKAHASHI YUSUKE）
 京都大学・高等教育研究開発推進センター・特定助教
 研究者番号： 20615471

研究成果の概要（和文）：

本研究は、パーソナリティ特性と身体的・精神的・社会的健康の関連性の全体像を把握するための新たな知見の蓄積のために、健康に関わるさまざまな指標を複数のサンプルに対して用いて調査データを取得し、パーソナリティ特性と健康の相互関連について包括的に紐解いていくことを主たる目的とする。

本研究の結果、パーソナリティ特性の変化は健康および健康に関連する行動の変化と正に相関することが確認され、これはパーソナリティ特性の変容が健康に対して影響を与えていることを示唆している。また、別の研究結果は、パーソナリティ特性が、その個人が子どものころに受けた養育態度と身体的な健康感の正の関連を媒介していること、そして、その媒介効果は年齢層を通じて一貫して持続力があることを明らかにした。このことは、養育態度はパーソナリティ特性の発達と健康増進のために介入可能性のあるターゲットのひとつであることを示唆している。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to accumulate scientific knowledge about the entire picture of links between personality traits and physical, mental, and social health. To this end, we had collected the survey data about a variety of health measures from several samples.

One of The results revealed that changes in personality traits were significantly and positively correlated with changes in health-related behaviors and changes in self-perceived physical health. This longitudinal study provides evidence that increases in personality trait score and health-related behaviors are associated with improvements in self-perceived health over time.

Another result revealed that personality trait fully mediated the effect of parental socialization of responsibility on self-rated health. The mediational links were consistent across younger, middle-aged and older-aged cohorts. Our findings suggest that greater parental socialization of responsibility relates to higher personality trait score, and consequently healthier adults. These findings imply that parental behaviors could be a plausible target for intervention to foster the development of personality traits and better health.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野： 社会科学

科研費の分科・細目： 教育心理学

キーワード： パーソナリティ特性, 身体的健康, 精神的健康, 社会的健康, 予測的妥当性, 縦断研究, 潜在変化モデル, オンライン調査

1. 研究開始当初の背景

健康は老若男女問わず私たち人間にとって普遍的な問題であり、Nature 誌による「社会科学が取り組むべき 10 の課題」の筆頭にも、健康の問題が掲げられている(Giles, 2011)。

世界保健機関(WHO)の定義によると、健康とは、「身体的にも精神的にも社会的にも安寧な状態にある」ことを指す。同じく WHO の出している世界保健統計 2010 によると、日本は世界一の長寿国であり(男女平均で 83 歳)、平均寿命の観点だけから見ると日本人は健康的だと言えるかもしれない。しかしながら、日本全国における入院患者数は増加を続け、2030 年にはそのピークをむかえ、2005 年比 33.6%の増加見通しである(病院業界事情ハンドブック 2010)。この見通しからすると、残念ながら日本人は必ずしも健康的と言えそうにはない。

急速な勢いで進行する現代の超高齢化社会において、身体的な健康の維持および増進させるための個人的な要因として、何が必要とされるのか。近年、パーソナリティ特性は、問題行動や精神病理的な症状をはじめとする心理学的な変数以外にも、寿命や身体的な健康などの社会疫学的な変数に対しても有意な予測力を持つことが示されている(Robert et al., 2007; 高橋他, 2011)。Roberts et al. (2007)は、死亡率に対して影響を与える可能性のある変数として、パーソナリティ特性・社会経済的地位(SES)・認知能力(IQ)の三者のうちどれがもっとも強い予測力を示すかメタ分析を行い、高い予測的妥当性を示したのはパーソナリティ特性であることを示した。また、高橋他(2011)は、パーソナリティ特性に関する最近の研究の展開を概観し、パーソナリティ特性は可塑的で変容可能性が十分にあることについてまとめ、教育などによる予防的介入について示唆している。よって、“予測力と変容可能性の高い変数としてのパーソナリティ特性”という視座を踏まえた調査研究は当然必要になると考えられる。

2. 研究の目的

申請者はこれまで「パーソナリティ特性は、(精神的な)健康・不健康とどのような関連があるのか」という一貫した問題意識のもと、パーソナリティ発達に関する調査研究を行ってきた。昨今、精神的な健康に加えて、身

体的・社会的な健康の問題も、心理学を含む社会科学でも積極的に取り扱うべき課題であるという認識が高まりつつある。

しかしながら、これまでに発達パーソナリティ心理学の見地から健康科学に対して提供されてきた知見にはいくつかの限界点が見受けられる(例えば、先行研究は相関的な研究が多く、身体的な健康のみしか扱っていないことが多い)。よって、それらのいくつかの限界点を乗り越えて、パーソナリティ特性と身体的・精神的・社会的健康の関連性の全体像を把握するための新たな知見の蓄積を開始する必要がある。

そこで、本研究計画では、健康に関わるさまざまな指標を複数のサンプルに対して用いて調査データを取得し、パーソナリティ特性と健康の相互関連について包括的に紐解いていくことを主たる目的とする。

3. 研究の方法

本研究における主な手法は質問紙調査であった。結果の適切な一般化を試みるため、年齢横断的で大規模なサンプルに対してオンライン調査を実施した。標本サイズは1,500人程度で、年齢幅は20歳から69歳であった。質問項目の構成は、パーソナリティ特性・身体的な健康・精神的な健康(抑うつ症状や不安症状)、社会的な健康(主観的幸福感や人生満足度)などである。上記の尺度項目以外では、年齢・性別・学歴・収入など健康に関連すると考えられる共変量をたずねた。

4. 研究成果

平成 23 年度においては、まず、パーソナリティ特性のひとつである勤勉性(conscientiousness)が、その個人が子どものころに受けた養育態度と身体的な健康感の正の関連を媒介していること、そして、その媒介効果は年齢層を通じて一貫していて、持続力があることを明らかにした。この研究結果は Psychology and Health 誌に採録された。

また、パーソナリティ発達についての英語総説論文を Japanese Journal of Personality(パーソナリティ研究)誌に執筆、採択された。

さらに、近年発展著しい統計手法のひとつである、潜在軌跡モデリング(group-based trajectory analysis)による縦断データの分析を、大学生のみを対象としたパーソナリティ特

性と精神的な健康に関する3時点の短期縦断データに対して用いて、複数件の学会報告およびセミナーを行った。

平成24年度においては、パーソナリティ特性のひとつである勤勉性の変化が身体的な健康感および健康に関連する行動の変化と関連することを潜在変化モデルを用いて明らかにし、この研究成果は *Journal of Personality* 誌に採択された。

発達パーソナリティ科学的の観点から、パーソナリティ特性の発達と個人差が、身体的な健康・精神的な健康・社会的な健康(QOL)に対してどのように影響を与えているのか体系的に研究することが本研究計画の大筋にあった。

本研究の結果は、不健康の発生を未然に防ぐための予防策や発生と維持のプロセスを変化させるための方策へ示唆を与える点において学術的に有意義である。

また、健康の問題について社会科学でも大きな問題として扱われるようになった昨今、本研究は、社会的な要請にも対応した適切な情報を与えることのできる社会的インパクトをもつものであり、今回の研究活動スタート支援で蓄積できた知見をもとに、さらなる縦断研究を重ねるための調査と分析を現在実施している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

1. Takahashi, Y., Edmonds, G. W., Jackson, J. J., & Roberts, B. W. (*in press*). Longitudinal correlated changes in conscientiousness, preventative health-related behaviors, and self-perceived physical health. *Journal of Personality*. DOI: 10.1111/jopy.12007
2. Moriya, J., & Takahashi, Y. (*in press*). Depression and interpersonal stress: The mediating role of emotion regulation. *Motivation and Emotion*. DOI: 10.1007/s11031-012-9323-4
3. Ando, J., Fujisawa, K. K., Shikishima, C., Hiraishi, K., Nozaki, M., Yamagata, S., Takahashi, Y., Ozaki, K., Suzuki, K., Deno, M., Sasaki, S., Toda, T., Kobayashi, K., Sugimoto, Y., Okada, M., Kijima, N., Ono, Y., Yoshimura, K., Kakihana, S., Maekawa, H., Kamakura, T., Nonaka, K., Kato, N., & Ooki, S. (2013). Two Cohort and Three Independent Anonymous Twin Projects at the Keio Twin Research Center (KoTReC). *Twin Research and Human Genetics*, 16(1),

202-216.

DOI: 10.1017/thg.2012.131.

4. Yamagata, S., Takahashi, Y., Ozaki, K., Fujisawa, K. K., Nonaka, K., & Ando, J. (2013). Bidirectional influences between maternal parenting and children's peer problems: A longitudinal monozygotic twin difference study. *Developmental Science*, 16(2), 249-259. DOI: 10.1111/desc.12021
5. Takahashi, Y., Roberts, B. W., & Hoshino, T. (2012). Conscientiousness mediates the relation between perceived parental socialization of responsibility and self-rated health. *Psychology and Health*, 27(9), 1048-1061. DOI: 10.1080/08870446.2011.652110
6. Roberts, B. W., & Takahashi, Y. (2011). Personality trait development in adulthood: Patterns and implications. *Japanese Journal of Personality*, 20(1), 1-10. DOI: 10.2132/personality.20.1
7. 松下佳代, 小野和宏, 高橋雄介. (2013). レポート評価におけるルーブリックの開発とその信頼性の検討. *大学教育学会誌*, 35(1), 107-115.
8. 山形伸二, 高橋雄介, 木島伸彦, 大野裕, 安藤寿康. (2011). Gray の行動抑制系と不安・抑うつ—双生児法による4つの因果モデルの検討—, *パーソナリティ研究*, 20(2), 110-117.

[学会発表] (計 19 件)

1. 高橋雄介 (2011). 混合軌跡モデリングを用いた2つの実データ分析事例: 大規模長期縦断データと小規模短期縦断データ, 日本心理学会第75回大会, 日本大学, 9月15~17日
2. Edmonds, G. W., Hill, P., Takahashi, Y., & Roberts, B. W. (2011). The healthy lifestyle as a mediator of the effects of personality on health. 2nd Biennial Conference of Association for Research in Personality, California, U.S.A. June 16-18.
3. Moriya, J., & Takahashi, Y. (2011). Depression and interpersonal stress: The mediating role of cognitive emotion regulation. 15th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Individual Differences, London, U.K., July, 25-28.
4. Hiraishi, K., Shikishima, C., Takahashi, Y., Yamagata, S., Sugimoto, Y., & Ando, J. (2011). Heritability of decisions and outcomes on public goods games. 23rd Annual Meeting of the Human Behavior and

- Evolution Society, Montpellier, France, June 29-July 3.
5. Yamagata, S., Sakai, A., Maeshiro, K., Matsuura, M., Tanaka, M., Takahashi, Y., Sugawara, K., Kijima, N., Sugawara, M. (2011). A MAOA gene, mother's parenting, and behavior problems: Using an MZ twin difference to detect 'pure' gene-environment interaction. 41th Annual Meeting of the Behavior Genetics Association, Rhode Island, U.S.A. June 6-9.
 6. 高橋雄介 (2011). 抑うつ・不安症状の短期的な発達軌跡と BIS・BAS・EC との関連—成長混合モデリングを用いた検討—, 日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会, 京都光華女子大学, 9 月 2~4 日
 7. 畑野快, 高橋雄介 (2011). 大学生のキャリア意識が学習動機づけと学習行動に与える影響, 日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会, 京都光華女子大学, 9 月 2~4 日
 8. 田中麻未, 高橋雄介 (2011). 中学生の学校不適応感とパーソナリティとの関連における短期縦断的検討, 日本パーソナリティ心理学会第 20 回大会, 京都光華女子大学, 9 月 2~4 日
 9. 田中麻未, 高橋雄介, 菅原ますみ (2011). 思春期の抑うつに及ぼす遺伝と環境の影響 - 性差についての行動遺伝学的検討, 日本心理学会第 75 回大会, 日本大学, 9 月 15~17 日
 10. 山形伸二, 加藤憲司, 出野美那子, 藤澤啓子, 鈴木国威, 高橋雄介, 安藤寿康 (2011). 就学前後期の子どもの適応と慢性疲労, 日本心理学会第 75 回大会, 日本大学, 9 月 15~17 日
 11. 松下佳代, 高橋雄介, 坂本尚志, 田川千尋, 田口真奈 (2013). VALUE ループリックの意義と課題 —規準とレベルの分析を通して—, 第 19 回大学教育研究フォーラム, 京都大学, 3 月 14~15 日.
 12. 高橋雄介 (2012). ウェブ調査法の可能性と限界, 日本心理学会第 76 回大会, 専修大学, 9 月 11~13 日.
 13. 山形伸二, 高橋雄介, 尾崎幸謙, 藤澤啓子, 野中浩一, 安藤寿康. (2012). 親子はどのように相互に影響を与えるか—縦断的一卵性双生児差異法による純粋な因果効果の検討—, 数理社会学会第 54 回大会, 関東学院大学, 8 月 30~31 日.
 14. Takahashi, Y., Roberts, B. W., & Hoshino, T. (2012). Conscientiousness mediates the relation between perceived parental socialization of responsibility and self-rated health. 26th Conference of European Health Psychology Society, Prague, Czech Republic. August, 21-25.
 15. 小野和宏, 井上誠, 山村健介, 西山秀昌, 八木稔, ステガロユ・ロクサーナ, 重谷佳見, 前田健康, 高橋雄介, 松下佳代 (2012). 大学学習法へのパフォーマンス評価の導入, 第 31 回日本歯科医学教育学会, 岡山コンベンションセンター, 7 月 20~21 日.
 16. 高橋雄介 (2012). 一般化可能性理論を用いたパフォーマンス評価の信頼性の確認, 大学教育学会第 34 回大会, 北海道大学, 5 月 26~27 日.
 17. Takahashi, Y. (2012). Spousal similarity for personality traits and marital satisfaction. 16th European Conference on Personality, Trieste, Italy, July 10-14.
 18. 高橋雄介, 星野崇宏 (2012). パーソナリティ特性の変化は健康の変化とどのように関連するか, 日本教育心理学会第 54 回大会, 琉球大学, 11 月 23~25 日.
 19. 出野美那子, 山形伸二, 藤澤啓子, 鈴木国威, 高橋雄介, 安藤寿康 (2012). 就学前後期における不登校傾向への関連要因: 保育士・教師とのコミュニケーションとの関連, 日本心理学会, 専修大学, 9 月 11~13 日.
- 〔図書〕 (計 3 件)
1. 高橋雄介, ナカニシヤ出版, 測定・評価場面における信頼性と妥当性 (生成する大学教育学, 第 5 章コラム)
 2. 高橋雄介, ナカニシヤ出版, パーソナリティの遺伝子探し (パーソナリティ心理学概論—性格理解への扉—, 第 4 章コラム)
 3. 高橋雄介, 朝倉書店, 縦断データの分析 I—変化についてのマルチレベルモデリング (菅原ますみ・監訳)
- 〔その他〕
ホームページ等
<http://www001.upp.so-net.ne.jp/yuckke/>
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
研究者番号:
高橋 雄介 (TAKAHASHI YUSUKE)
京都大学・高等教育研究開発推進センター・特定助教
研究者番号: 20615471
 - (2) 研究分担者
なし
 - (3) 連携研究者
なし